平成19年 9/20

2007年 23 いきいきTAMA

たま 広報 第1055号

今号の主な内容
★
★

人口と世帯数　9月1日現在住民基本台帳及び外国人登録調べ

人口	男	女	世帯
146,913	73,335	73,578	64,150
2減	9増	11減	33増

●公式ホームページ
http://www.city.tama.tokyo.jp/
市長へのEメールは上記ホームページからご利用ください
●公式モバイルサイト
http://mobile.city.tama.tokyo.jp/
バーコード読み取り機能付携帯電話で読み取ってください▶

発行 多摩市　〒206－8666 関戸6－12－1／編集　情報推進課
市役所の代表電話 375-8111　市長へのファクシミリ 338-3311

ウオーキングの参考に・・・

こんなコースや見所があります！

●アニメ映画「耳をすませば」のモデル地域となった桜ヶ丘のコース

10月6日(土)～8日(祝)には、関戸公民館市民ギャラリーで背景画展「耳をすませば・・井上直久の世界」が開催されます（予定）。

●お散歩マップ

多摩大学の学生と聖ヶ丘小学校の生徒と地域住民が、わんわんパトロールの情報を参考に作成したマップです。健康センター等でご覧いただけます。

●多摩ＧＯ！

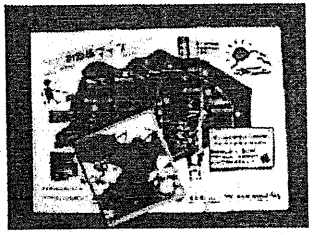
多摩ニュータウンの歴史的な意義、暮らしやすさの工夫等、見所満載です。ご希望の方は、お問い合わせください。

▷問合せ　ＵＲ都市機構ニュータウン事業部
☎(373)8107

このほか、万葉集で多摩の横山と詠われた「よこやまの道」、健康づくり推進員の「いきいき健康ウォーキングマップ」（全10コース）が、公式ホームページでご覧いただけます。

自分にあったウオーキングコースを見つけてください。

中央商店会「耳をすませばモデル地案内マップ」



お散歩マップin聖ヶ丘・連光寺

UR都市機構「多摩GO!」

『毎日新聞』朝刊 2007年9月23日 毎日新聞社発行

学生と授産施設 手作りパン教室

多摩

多摩大学経営情報学部（多摩市）の学生と、多摩ニュータウンの諏訪団地商店街（同）にある知的障害者通所授産施設「どんぐりパン」が合同で22日、同施設で手作りパン教室を開いた。施設がパンの販売も行っていることを地域住民に知ってもらい、商店街に客足を呼び戻そうという試みだ。同大学側が提案して実現した。

2～4年生の学生27人が、障害者や施設スタッフからパン作りを事前に教わり、この日は小学生ら12人と一緒にパンを作った。生地をこねて、形を整え、ネコやウサギの顔をかたどった動物パンや、ピザパン、パンケーキを焼き上げた。

参加した2年生の栗原崇さん(20)は「地域のいろいろな人と話す機会を持て、貴重な経験になった」と笑顔を見せた。【町田徳丈】

子供にパン作りを教える多摩大の学生

諏訪・永山地域磨けば光る
「地域の宝物」探し・2007～秘宝展示会～

地域の住民や大学生が発掘した諏訪・永山地域の「宝物」(大切な資源・もったいない資源など)の展示・発表とこれからの活かし方の意見交換を行います。

▷日時　12月15日(土)午後1時30分～4時30分
▷場所　諏訪地区市民ホール2階第1会議室
※午前中は、諏訪商店街の「まぜこぜスクエア」で「お宝マップ」展示
▷コメンテーター　松本祐一氏(多摩大学総合研究所准教授)、松本暢子氏(大妻女子大学教授)、地域の方々
▷主催　諏訪・永山地域まぜこぜ懇談会
▷共催　多摩大学・松本ゼミ
▷後援　多摩市、国土交通省土地・水資源局、ＵＲ都市機構
▷申込・問合せ　諏訪・永山地域まぜこぜ懇談会事務局連絡先(暫定)ＮＰＯ法人多摩ニュータウン・まちづくり専門家会議☎(337)5609、FAX(337)5599、Ｅメール(info@machisen.net)

街をつくる まちに生きる

多摩NT40年

にぎわい④

商店街

「活気戻れ」学生助っ人

「いらっしゃい」「焼き鳥いかがですかー」。そのほか、豚汁、おでん、おしるこに甘酒……。出店に立つ学生から、元気な客寄せの声がかかる。

今月上旬、多摩市の「多摩諏訪名店街」が行ったクリスマスセールに、法政大現代福祉学部（町田市）と国士舘大多摩キャンパス（多摩市）の学生が、助っ人に入った。2日間で約70人。

諏訪名店街の会長(58)は「日当を払ったら大変な額。われわれだけではここまでできない」と、学生の労をねぎらう。「店と顔なじみになれた。またやりたい」。学生からも前向きな声が上がる。

名店街は71年、多摩ニュータウン（NT）で最初に入居した諏訪地区の団地住民に、日用品を提供するために造られた。

分譲と賃貸を合わせて約30店舗。だが、永山駅前や郊外の商業施設に客を奪われ、ここ数年で飲食店はなくなり、生鮮品を扱う店も精肉店など2店だけになった。昨年はミニスーパーも撤退、シャッターを閉めたままの店舗もある。後継ぎのいない店も多く、活気を失っていた。

その再生策を探ろうと、昨年から調査を続けていたのが法政大の保井美樹准教授のゼミだった。店主や近隣大学に呼びかけ、7月には七夕セールを支援。その第2弾として今回は、空き店舗での落語会、ウオーキングなども企画。すぐ隣の永山地区の商店街と共同で、手製のイルミネーション

出店で販売を手伝う学生たち。地元の中学生が制作したツリーも飾られ、雰囲気を盛り上げた＝多摩市諏訪5丁目で

もともとした。

「地域の活性化には、その土地の人やモノを最大限に利用する必要がある。幸い周辺にはたくさん大学がある。その力を生かしたかった」。学生と商店街の橋渡しをしたNPO「多摩ニュータウン・まちづくり専門家会議」の片桐徹也さん(39)は話す。

商店街の一員になってサポートしようと、同NPOは今月15日、事務局の別室を名店街の空き店舗に移した。オープニングには、多摩大（多摩市）や大妻女子大（同）の学生たちも参加。団地の隠れた魅力を再発見した成果を「お宝マップ」として報告し合った。

事務局には、大学同士の連携拠点にも使えるフリースペースを設ける。学生を指導する多摩大総合研究所の松本祐一准教授は「学生にとっても、地域のことを実践的に学べる場は貴重。春からは、もっとお手伝いしたい」と意欲をみせる。

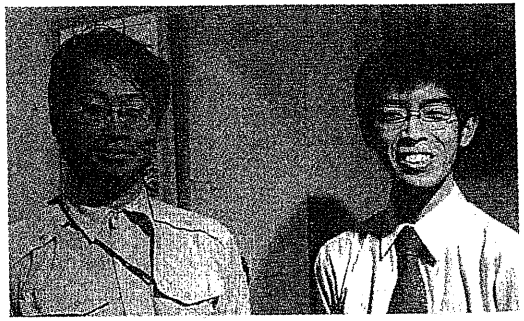
意見など募集

「街をつくる　まちに生きる」は10月から「高齢化」「住まい」「にぎわい」の各シリーズを連載しています。この連載へのご意見や、多摩ニュータウンにかかわるご経験、思いをお寄せください。朝日新聞立川支局「多摩NT40年」担当（〒190・0012 立川市曙町2の38の5、FAX042・524・5106、メールtachikawa@asahi.com）へ。

明日を拓く

地域と市民を結ぶSNS

SNSとはソーシャル・ネットワーキング・サービスの略で、会員制のウェブサイト上で個人情報を公開し、会員同士友人を紹介したりして知り合いを増やすことの出来るコミュニティ型の機能を提供するサービス。そのネットワークが目に見えることが楽しさの主要因、2チャンネルのように誰でも参加できる掲示板やチャットルームは荒らされることもあるが、SNSは相対的に閉じられた共同体なので安心感が高い。地域SNSは地域のつながりを求めたオンラインを形成しつつあり、近年は官庁や自治体が地域おこしの有効手段として注目している。



（左）山野篤さんと（右）返町宗一郎さん

地域の身近な行事や活動・ニュースを「映像」で伝え、地域の情報の発信と受信、地域での仲間づくりや災害時にも活用出来る。地域SNS「ネッツたま」で地域と市民の放送局（CRNS）を運営しているのは山野篤さんと反町宗一郎さん。2人は多摩大学経営情報学部卒、23歳。在学中から映像媒体でコミュニティづくりと起業を模索してきた。「耳をすませば」10周年記念コンサートの手伝いや関戸花火大会の記録ビデオ制作を多摩市から請け負い、多摩地域との関わりが生まれた。就職率100%を誇る多摩大で、2人はあえて〝地域メディアを展開すること〟を選択。

昨年10月から3月まで多摩テレビで放映された「みんなの地域活動」、愛称〝みんちかっ〟は地域の市民活動団体の紹介や活動内容を伝え、ボランティア参加へのきっかけとなり、また団体が提供するサービスを利用してもらえれば、と多摩NPO協会が制作。2人は会員でディレクターとして参加した。

〝みんちかっ〟を手掛けたことで見えてきたこと。「愉しさを伝えること」とソフトウェア系の山野さん。CRNSの代表と司会等を務める。反町さんはメカに強くハードウェア系。撮影等を担当、「カメラワークの機動性、色彩の出し方」にこだわる。映像理論や撮影技術を体系化、撮影出来る映像に幅を持たせるカメラを増やしたい。現在Pod Castingで配信している映像をより多くの場所で配信し、生中継でリアルタイムに情報を伝えたい、と2人の目標は広がる。なにより地域メディアをビジネスとして確立すること。ソフトウェアとハードウェアの2人がタッグを組んで創り出す市民メディアはどんなベクトルを描いていくのか。

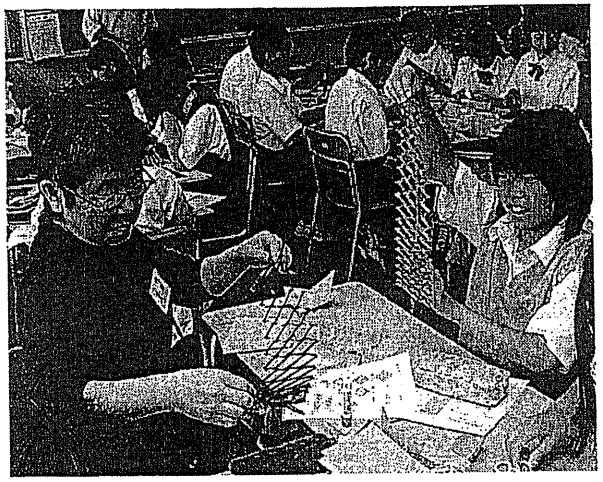
メディアは単なる情報の伝達手段ではなくそのあり方いかんにより伝達内容も変化させる。社会とメディアのあり方はメダルの裏表、近代日本の首都一極集中化のもとでは全国紙や国家的メディアが強く多元的な地域振興が失われていた。今、地方の時代といわれる中、プロやマスメディアがカバー出来ない地域情報や専門情報を追求したり、オルタナティブな言論の場として住民の生きがいを満たす営みとして地域メディアは期待されている。

『朝日新聞』 2008年6月19日 朝日新聞社発行

中1授業で団地応援

多摩NT・諏訪中

団地再生に中学生も協力――。活気を失っている多摩ニュータウンの諏訪団地の商店街を応援しようと、近くの多摩市立諏訪中学校（肥後忠弘校長）の1年生が、ボランティア授業の一環として助っ人に乗り出した。地域の高齢者や近隣大学の学生たちと七夕飾りを作り、商店街に来月飾って七夕セールを華やかに彩る。大学生らは昨年から商店街に協力しており、地域ぐるみの支援の輪が広がっている。（永沼仁）



近隣の高齢者らと七夕飾りを作る中学生＝多摩市立諏訪中

3クラス 商店街の七夕飾り

37年前に入居の始まった諏訪団地は、多摩ニュータウンで最も古い団地の一つ。二十数店舗ほどの商店街は、大型スーパーが進出した影響などで活気を失っている。

その商店街を盛り上げようと、昨年は近隣の大学の学生たちが七夕セールに協力。空き店舗でイベントを催すフェスタを開いた。諏訪中では、生徒会がクリスマスのイベントでモニュメント作りに参加した。

今年は、こうした商店街との交流をさらに進めようと、同中がボランティアの授業に組み込むことになった。手始めに1年生の3クラス約120人が七夕飾り作りに挑戦した。

授業には、近くの高齢者や団塊世代の住民、多摩大、大妻女子大、法政大の学生ら約20人も参加。約2時間かけ、さお6本分の飾りを折り紙で一緒に作った。

大学生・お年寄り…世代越え輪

諏訪団地ができて以来住み続けている安西文江さん(75)は「昔のにぎわいを取り戻すのは難しい。でも、子どもたちと一緒に貢献できてよかった」と話す。

諏訪中側も「生徒も自分の飾りや願いがつるされることが楽しみになったようです」。

中学校と商店街の橋渡しをした「諏訪近隣・七夕フェスタ実行委員会」委員長の片桐徹也・多摩大客員准教授は「諏訪団地は高齢化も進んでおり、多世代交流が必要。学校を含めた地域全体で商店街の再生に取り組む意味は大きい」と話す。

完成した七夕飾りは、7月1日に飾り付ける。

フェスタは5、6の両日開かれ、商店街で買った食材を自由に焼いて楽しむ「七輪ひろば」やカフェが設けられるほか、空き店舗では子ども対象の工作教室や落語会なども開かれる。

『北海道新聞』 2008年9月18日 北海道新聞社発行

多摩大生が英語でHP原稿

利尻の情報 発信に協力

利尻島の情報を収集する佐野裕美子准教授（右から3人目）とゼミ生たち

【利尻】四年間学んだ英語を役立てたいと、多摩大学経営情報学部（東京）の四年生が、町観光協会のホームページ（HP）と観光パンフレットの英語版の原稿作成に取り組んでいる。同協会は出来上がった原稿を基に、来年三月末に英語版のHPと観光パンフレットを作製する予定だ。（西島徹通信員）

現地調査 パンフ用も作成

原稿作成に当たっているのは、同学部の佐野裕美子准教授のゼミ生十二人。同学部の学生は学内新聞の英語版作製や、学部がある東京都多摩市周辺の小学校などで英語を教えるといった活動に取り組んできた。

今回の取り組みはこの春、佐野准教授が家族旅行で利尻島を訪れたのがきっかけ。

佐野准教授は利尻島の自然などに感動したが、島内に英語で解説する看板やパンフレットがほとんどないほか、島内で出会った外国人が利尻島の情報を得たがっていたことから、ゼミの題材に取り上げた。

ゼミ生十二人は、町観光協会のHPを約二カ月がかりで英訳したが、このうち六人が利尻島内の観光スポットなどを実際に見るため今月上旬、訪れた。

六人とも利尻島は初めて。原稿作成のリーダーを務める山原大志さんは「行ったことがない場所のことを限られた情報で作るのは大変だったが、今回の訪問で情報不足を補えた」と話した。

観光パンフレット用の英語版原稿も作ることにしており、HP用の原稿とともに年内に完成させる予定。同協会は、原稿を基に英語版のHPとパンフレットを作製する。

＜第三種郵便物認可＞ FuJi Sankei Business i. 2008年11月3日(月) 産学協同・VB 13

トランスコスモス・多摩大の産学連携

「知的プロ」の基礎学ぶ

社会人に欠かせない基礎能力を伝授します―。コールセンターやテレマーケティング大手のトランスコスモス（東京都渋谷区）と多摩大学（東京都多摩市）は、今年から産学連携で同大学の学生向けにこんな取り組みを始めた。

ゼミナール形式で2週間に1度の頻度で行われるその取り組みの名は「知的プロフェッショナルゼミナール」。

1回あたりの授業時間は長いときで3コマ（4時間30分）となる。そんな厳しいゼミに経営情報学部の13人の学生が挑んでいる。

知的プロフェッショナルとは、コンサルタントやリサーチャー、システムエンジニア、プランナーといった知識を使いこなし、その世界で活躍する人たちのことをさす。その知的プロフェッショナルに必要な思考力やコミュニケーション力、プレゼンテーション力、リーダーシップ力といった基礎的な能力を習得するのがゼミの狙いだ。

トランスコスモスはサービス開発の部署などで活躍する3人の社員をゼミの講師に派遣している。ゼミのプログラムはトランスコスモスのコンサルタントやアナリストなどを対象に実践している教育プログラムをベースにして学生向けに改良した。

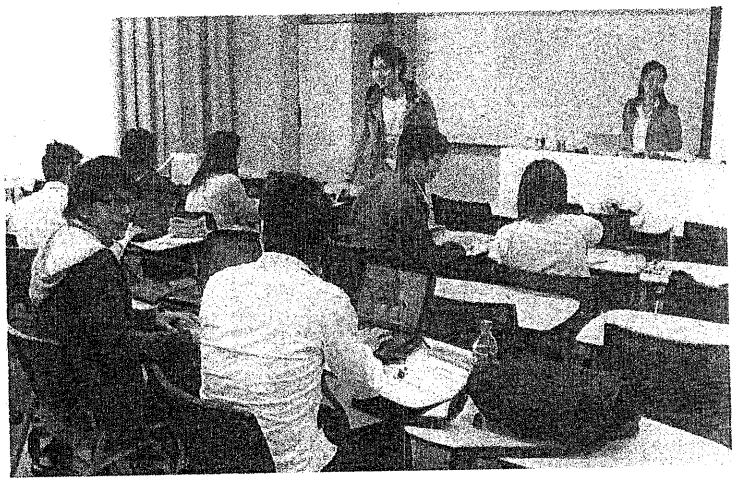
実践的なプログラムになるように春から夏までの机上学習を終え、秋以降は学生がコンサルタント役となって顧客企業役からの依頼に応えるという課題にチャレンジしている。

顧客企業役からの依頼は「分析ツールを大学向けに拡販するため力を貸してほしい」というもの。学生たちは顧客の製品である分析ツールそのものの理解を深めたり、同大学の関係者などから分析ツールのニーズをヒアリングする市場調査などを実施。そのデータを基に販売促進に向けたアイデアを練って報告するまでのマーケティングにかかる一通りの流れを体験する。

もちろん、ゼミのゴールとなる顧客への報告に至るまでのプロセスも重要だ。ゼミで講師をつとめるトランスコスモスの社員らが学生たちの仕事の進捗（しんちょく）状況などをチェックする。その課程に問題があれば指導する。

学生たちの多くはこれまで授業を受け身の姿勢で受けてきた。しかしゼミでは受け身は許されない。社会で求められる自分で考え、結論を導き出すことが要求される。しかも、共同で作業をする仲間とのコミュニケーション力までも問われる。こうした体験がほとんどないだけに戸惑いの表情を浮かべる学生は少なくない。

「学生を追い込み、緊張感を持たせる。少しでも社会の厳しさが体験できれば上出来です」。ゼミの担当教員である酒井麻衣子・多摩大学経営情報学部准教授は、こんな学生たちの姿を見て目を細める。教壇に立つ以前、民間企業でデータ分析に携わった経験を持つだけに、「このゼミを通じて社会で通用する社会人の卵を社会に送り出したい」と意気込む。



トランスコスモスと多摩大学が産学連携で行う「知的プロフェッショナルゼミナール」

一方、ゼミの講師を務めるトランスコスモスの中野末知子・サービス企画本部企画3部部長代理シニアヒューマンケイパビリティアーキテクトは、「今後、ゼミでの効果などを検証し、当社の社員研修などのプログラムを作成する上で役立てていきたい」と話している。

『毎日新聞』 2008年11月11日 毎日新聞社発行

チームの運営戦略提言

多摩大 サッカービジネスプロジェクト

キャンパスウオーク これが評判！

多摩大（多摩市聖ケ丘4）は、今年度からスポーツビジネスを学ぶ実習型の講義「サッカービジネスプロジェクト」を始めた。Jリーグ2部の横浜FCの協力を得て、学生たちがチームを盛り上げるイベントを企画する取り組みだ。10月25日の横浜・ニッパツ三ツ沢球技場であった愛媛FC戦でも学生提案のイベントが展開された。

経営情報学部の2～4年生10人が受講し、プロジェクトは提案とイベントの2本立て。どんなサッカースタイルが好きか、球技場近くに駐輪場があったほうがいいかなど、来場者へのアンケートに基づき、チームの運営戦略をまとめて提言する。さらに新たなファンの獲得、来場者の満足度アップを目指し、チームとは別に独自のイベントを手がけている。

10月25日には、大学の予算でチームカラーの青色のフェースシールや鉢巻きなど応援グッズを無料配布。三浦知良選手がJ2最年長ゴール決めると、サポーターが「ゴール」と叫ぶ事前録画の映像を大型ビジョンで上映し試合を盛り上げた。両チームのサポーター同士の「選手宣誓」も実現させた。【堀智行】

10月25日の試合で来場者に応援グッズを配る多摩大生＝多摩大提供

『読売新聞』 2008年12月4日 読売新聞社発行

お茶で学ぶ 和の心

裏千家茶道を学ぶ多摩大（多摩市）の学生3人が、子どもたちに日本文化やもてなしの心を伝える「茶道体験イベント」が3日、板橋区立成増南児童館（成増1）で開かれた＝写真＝。区立成増小1～3年生の児童19人が学生にお点前を習った後、茶をたて、向き合った友達に「お茶をどうぞ」。大きな茶わんを受け取った児童は「これで良いのかな」と左右を横目で見ながら茶を口に運んだ。「思ったより苦くない」という声の一方で、思わず顔をしかめて舌を出す児童も。

指導役の同大2年、福島優子さん(19)は「日本古来の文化を身近に感じてくれたら」と話していた。

『朝日新聞』 2008年12月12日 朝日新聞社発行

多摩NTの歴史 聞き書きで保存

あすシンポ

地域で暮らす人たちの話を記録していく「聞き書き」をテーマにしたシンポジウムが13日、多摩市関戸公民館（関戸4丁目）で開かれる。多摩ニュータウンの資料の収集活動を続けている多摩ニュータウン学会の主催。「街の歴史を、住民へのインタビューから知ることの魅力を考えたい」としている。

ニュータウンの住民から生活史や人生経験を聞いた多摩大（多摩市）の学生たちの報告、聞き書きの活動を続けているNPOや市民団体の代表によるフリートークのほか、聞き書きを実際に体験する企画もある。

企画した同大総合研究所の松本祐一准教授は「ニュータウン学会は文書や映像だけでなく、開発の生き証人の口述史も保存対象にしており、聞き書きの活動をさらに広めていきたい」と話している。午後1～4時半。資料代300円。

『読売新聞』 2008年12月12日 読売新聞社発行

「聞き書き」通し 街や仕事を考察

多摩市関戸公民館で13日、人生の先輩への「聞き書き（インタビュー）」を通して街や仕事について考えるシンポジウムが開かれる。NPO法人多摩ニュータウン学会と多摩大学総合研究所が共催する。

同学会は2006年から、多摩ニュータウン開発に関する資料の収集・保存活動に取り組んでいる。その一環で、同研究所の松本祐一准教授(36)のゼミ生と共に、地元住民への聞き書きも行っている。

シンポジウムでは、ゼミ生のほか、造林や炭焼きなどに携わっている人に高校生が話を聞く「森の聞き書き甲子園」を主催するNPO法人「共存の森ネットワーク」が事例を報告。続いて、同NPO理事らパネリスト3人が聞き書きについて語る。会場では、参加者による聞き書き体験もある。同学会理事も務める松本准教授は「ぜひ、新しい世代を築く若い人たちに参加してほしい」と話している。

午後1時～4時半。定員80人。参加費(資料代)300円。同学会ホームページ(http://www.tama-nt.org/)から申し込む。

『東京新聞』 2008年12月27日 東京新聞社発行

目黒

日本文化楽しんで！

多摩大生が児童を指導

大学生から茶わんの持ち方を習う児童たち＝目黒区で

多摩大（多摩市）の日本の伝統文化の伝承活動「日本大好きプロジェクト」で、目黒区立ひもんや学童保育クラブ（碑文谷）の児童たちが二十六日、茶道を体験したり、紙芝居を楽しんだりした。一―三年の三十七人は、裏千家の茶道家や村山貞幸・経営情報学部教授のゼミ生から教わり、自分で茶せんを使ってたてたお茶を味わった。三年畑宇杏さん(八)は「ちょっと苦いけど、おいしい。お茶をたてるのは楽しい」、三年角田洸春君(八)は「家で飲むお茶よりおいしい。もっとやりたい」と話した。この後、昔話や八岐大蛇（やまたのおろち）の紙芝居も上演された。

プロジェクトは学生が幼稚園や保育園などで、専門家と一緒に空手や和太鼓、和紙作りなどを教える。伝統文化から礼儀などビジネスマナーを学び、専門家らとの交流を通じコミュニケーション能力を身に付ける。学校法人の本部が区内にあり、区内の施設でも活動を繰り広げている。

多摩大学企画「日本大好きプロジェクト」

子どもたちが茶道・紙芝居体験

伝えたい日本の心

紙芝居に聞き入る子どもたち

お茶をたてる真剣なまなざし

20年12月26日、ひもんや学童保育クラブで、小学校1～3年生の子どもたちが、多摩大学の学生と共に、茶道と紙芝居を体験しました。

多摩大学村山ゼミでは、子どもたちから高齢者まで幅広く伝統文化を伝える中で、日本を深く理解し、「大好き」になってもらうことを目指し、「日本大好きプロジェクト」を発足し、活動を行っています。

茶道では、おじぎの仕方、お菓子の食べ方などを学び、実際にお茶をたてました。「お茶はいつからあるのですか」などの質問も出て、皆興味深く体験したようです。

紙芝居は、民話や昔話をもとに学生たちが作成したオリジナル作品など3点が披露されました。分かりやすくメリハリをきかせて読み聞かせる紙芝居の世界に、子どもたちも引き込まれていました。

プロジェクトに込めた思いを語る

多摩大学 村山貞幸教授

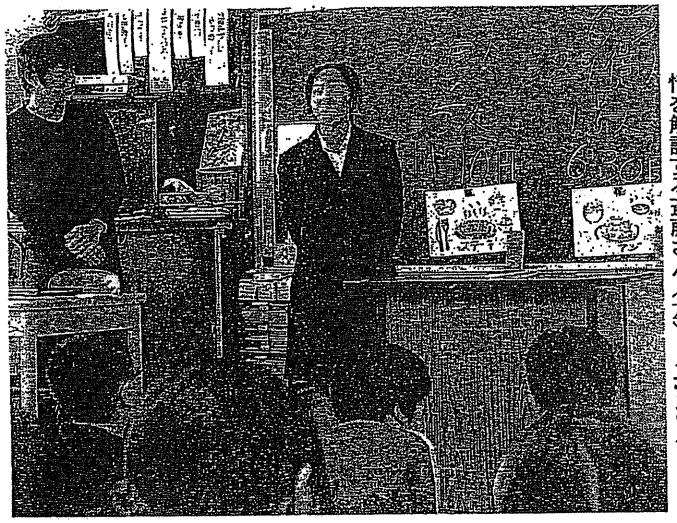
礼儀や自然を大切にする心など、日本が古来から持っていたよいものは、すべて伝統文化の中に根付いています。伝統文化を楽しく体験してもらう中で、そういうものを感性で酌み取ってもらいたいと、このプロジェクトを発足しました。特に、小さな子どもは感性が豊かです。小さなころから良質な伝統文化に触れることで、日本古来の心が自分の中に取り込まれ、いつの日か芽吹くと信じています。生活が欧米化され、外来のものがもてはやされる風潮にある今だからこそ、「日本大好き」な人が増えてほしい。そう願っています。

『読売新聞』朝刊 2009年2月20日 読売新聞社発行

教育ルネサンス

多摩大生 小学校で授業

世界の食糧事情テーマ



手作りの教材を使いながら世界の食糧事情を解説する斎藤さん（左）と二宮さん

多摩大学（多摩市）の学生による出前授業が19日、三鷹市上連雀4の市立第三小学校（白井千晴校長）で行われた。

6年生の3クラス約100人が授業を受け、飢餓や食糧問題について学んだ。講師は、同大経営情報学部4年の二宮理沙さん(22)と3年の斎藤竜也さん(20)が務めた。2人は菅野光公教授のゼミ「地球環境とビジネス」を受講し、環境問題や世界の食糧事情を学んでいる。二宮さんが「子どもたちに世界で起きている問題を伝えたい」と、母校でもある同小に出前授業を提案し、実現した。

2人は、「チョコレートをしらない子どもたち」と題したオリジナル紙芝居などを使ってアフリカの現状などを解説。「学校に行けず、家計を助けるためにココア農園で働く子どもたちがいる」「その子たちはチョコレートなんて見たこともないし、食べたこともない」と語りかけた。6年2組の鈴木あゆみさん(12)は「同じ地球に住んでいるのに大きな差があることや、食べられることのありがたさを実感した」と話していた。

トランスコスモス、多摩大連携第2弾 職場で“仕事力”特訓ゼミ

4月3日8時16分配信 フジサンケイ ビジネスアイ

インターネットを活用した販促支援サービス大手のトランスコスモス(東京都渋谷区)は、多摩大学(同多摩市)との産学連携を強化する。昨年4月に始めた第1弾の寄付講座に続き、2年目の2009年度は同社の本社を舞台に最先端のネットビジネスの現場を肌で感じてもらう小人数形式の“仕事力”特訓ゼミナールを開講する。

同大経営情報学部の正規科目として単位に組み入れられ、現役社員が非常勤講師の肩書で徹底指導する。理系学部の講座を共同研究の形で民間企業が施設提供なども含めてバックアップする例は多いが、今回のように文系科目で全面協力する産学連携の枠組みは珍しい。

講座名は「実践 知的プロフェッショナルゼミナール」で定員15人程度。1回90分の予定で春期、秋期にそれぞれ15回ずつ計30回開講する。同社の新規事業を一手に担うサービス企画本部の担当者が直接指導する。

学生は仮想の顧客企業の要望に基づき、自らのアイデアを企画・立案。実際の事業計画へと具体化させ、採算性などの厳しい検証作業を経ていかに成果が出せるかを学んでいく。

昨年度は社員をゲスト講師の形で派遣し、教授と共同講義する寄付講座を開講。今年度は「より演習的要素を強め、社員に交じってビジネスの最前線を実体験できる環境を提供する」(広報宣伝部)という狙いから社内を舞台にしたゼミ開講が実現した。同大も「早くから本物の社会に触れ、自立できる能力を身に付けてほしい」と期待している。

最終更新:4月3日8時16分

FujiSankei Business i.

http://headlines.yahoo.co.jp/hl?a=20090402-00000026-fsi-bus all

TAMA UNIVERSITY
多摩大学

現代の志塾

多摩大学のゼミ活動
～これまでの２０年、そして今～

発行：多摩大学　学長室
TEL：042-337-7300　FAX：042-337-7302